

宮下保司教授 東京大学退職記念誌

2015年3月9日
宮下保司教授 退任記念会

「超えられない師を持つということ」



酒井 邦嘉

東京大学大学院 総合文化研究科

教室在籍期間：1989年～1995年

宮下先生は江戸っ子のためか、独特の言い回しがある。言語の特徴から言えば、洗練化した「べらんめえ調」と言えよう（こう書くと、宮下先生は「こっぱずかしい」と仰るだろう）。ついこの間も、「～してもばちは当たらんだろう」とか「よっしゃ～」などと私が学生に口走った後で、我に返ると宮下先生の口癖が移っていたことに気づいた次第である。特に、「〇〇さん、感謝！」というよく聞き慣れた響きや、ユニットの記録を開始するときに興奮気味に「レディ？ レディ？」と発破をかける大声が、今なお鮮明に思い出される。さすがの私も MRI のスキャン前に「レディ？ レディ？」とは言わなくなったが。

私が生理学教室に入った当初の課題の一つはラップ（スパイク信号を音に変える装置）とアンプ（細胞外記録用）の作成であった。「電子回路を理解せずに脳の回路は理解できない」という伊藤正男先生の教えに従った新人トレーニングの一環であったが、実際にアンプを自力で作った世代は私で最後となった。今年度まで私は電子回路論を含めた「量子計測学」の講義をするという巡り合わせがあったから、まさに「芸は身を助ける」と言える。

私の課題のもう一つは、サルトレーニング用のプログラムを新たに PC-98 上で書くことだった。当時は宮下先生が使っていた PDP-11 と VAX という大型コンピューターからの移行期であった。幸か不幸か、賢く人の裏をかくサルに恵まれてプログラムは日々複雑化し、1 万行は超えたと思う。プログラムのバグ取りに加えて装置の修理は日常茶飯事で、サルを待たせながら実験室と秋葉原の電気街を駆け足で往復したことが懐かしい。宮下先生より伝授されたサルの調教法は、その後わが家の愛犬たちの仕付けに生かされている。

宮下先生から学んだことは計り知れないが、その筆頭は研究を最優先に考える姿勢である。それは、常にさまざまな仕事の優先順位を考えて、研究にかける時間を最大限確保するということだ。そして、研究上のさまざまな困難や制約に対して、解決策を見つけるまで努力を怠らないことである。この基本は、大学院生のときから今なお変わらないが、状況や選択肢は常に変化するから面白い。渡米後や帰国後を含めて研究の節目節目で宮下先生の助言を頂けたのはとても幸いなことであった。いったん打

ち合わせが始まると夕方から夜更けまでノンストップで続くことがあり、大手術に当たる外科医のように、直前に数分で腹ごしらえをしてから臨んだものである。

超えられない師を持つことの大切さは、学問に限らず芸術でも同じであろう。すぐれた先達の背中を見ながら自分を磨くこと、これにまさる鍛錬はないと言える。たとえ師に近づくことがあったとしても、それは「アキレスと亀」なのだ。そう考えていれば、どんな成果を上げようとも天狗になることなく進歩が続くであろう。寺田寅彦は次のように書いている。

「頭のいい人には他人の仕事のあらが目につきやすい。その結果として自然に他人のする事が愚かに見え従って自分がだれよりも賢いというような錯覚に陥りやすい。そうすると自然の結果として自分の向上心にゆるみが出て、やがてその人の進歩が止まってしまう。」(『科学者とあたま』)

同じフィールドに十年もいれば、そうしたゆるんだ状態に陥りやすいものである。通説を覆すような新しい仕事はとても少ない。月がいつも同じ軌道を回っているように、些細なヴァリエーションが続くだけに思えるかもしれない。

この閉塞感を打破する唯一の方法は、自ら新しいことを始めることである。本気で自分を初心者立場においてみるのである。それは大学者であればあるほど勇気のいることであり、相当の覚悟を要するはずだ。その冒険をものともせず、むしろ楽しんで取り組めるという人は極めて希有であるが、宮下先生はまさにそういう人である。

一方で、そうした研究の厳しさを次世代に伝えるのは実に難しい。この20年で社会や学生の意識は大きく変わってしまった。もはや叱咤激励するようなやり方は通用せず、褒めて育てる方式に切り替えざるを得なくなった。それでいて、自分で進んで考えようとはせず、ただ受け身で指示を待つだけの学生や、科学のデータを軽んじたりするような態度に直面して、私は未だに堪忍袋の緒を切らずにいられない。

大学において、研究と教育は不可分である。一方に肩入れしすぎて他方が空回りしてはいけないから、そのバランス感覚もまた常に磨き続けねばならない。その両方に少しでも貢献しながら、師に認めてもらえるような、そして願わくば師に驚いてもらえるような仕事をしたいものである。

終わりに、宮下先生のご健康と今後の益々のエネルギーなご活躍をお祈りして、この記念冊子に寄せる言葉としたい。